

中山大學

二〇〇五年攻读硕士学位研究生入学考试试题

科目代码: 455

科目名称: 日本文学

考试时间: 2005年01月23日午後

考生须知

全部答案一律写在答题纸上, 答在试题纸上的不得分!
答题要写清题号, 不必抄题。

(满分150点)

I、穴埋 (1×50=50点)

- 01、日本の皇室や民間に伝えられてきた神話・伝説・説話や歌謡は、天皇中心の国家体制の確立や国威の誇示を意図して編まれた『古事記』『日本書紀』『 』に取り入れられた。
- 02、日本の律令国家の下で盛んに中国文化が移入されてくるにつれ、中国の漢詩の影響を受けて、『 』が編まれた。
- 03、『日本書紀』の記載は或る時には を語り、或る時には を語らない。
- 04、『平家物語』の文体の魅力は、 を駆使する時には、その語の意味ではなくて雰囲気と七五調である。
- 05、山上憶良の「 」の歌は、直接に晋の東哲の「貧家賦」を踏まえる。
- 06、八世紀末の 遷都(七九四)から一〇世紀初へかけてのおよそ一〇〇年間は、そのときまでに輸入された大陸文化の「日本化」の時期である。
- 07、九世紀の初(八〇四)に遣唐使に従って唐へ遊学した伝教大師最澄(七六七～八二二)は、翌年日本に帰って、天台宗を開いた。最澄と共に入唐した弘法大師空海(七七四～八三五)は、翌翌年に帰って、 を伝えた。
- 08、紀淑望が作った『古今集』の「真名序」は、その冒頭の一般的理論を『 』の「大序」に採り、紀貫之の「仮名序」は大いに「真名序」に拠る。
- 09、『 』には、中心が全くなかったわけではない。物語の多くの断片は、在原業平に仮託される人物の恋の話である。
- 10、自然主義文学運動を理論的に支えたのは、長谷川天溪・ らであった。『早稲田文学』によって、美学的な立場から自然主義文学運動の啓蒙や指導に力を尽くした。
- 11、宋学が古代儒教と異なるのは、 に対して儒教を守るために、仏教的なるものを取り入れて、体系的な形而上学を作ったという点である。
- 12、宮本武蔵は、戦国武士の生き残りであり、一七世紀初めの『 』は、いかにして相手を殺すかということについての、実際的で技術的な教科書であった。
- 13、山本常朝は恐らく真剣勝負を経験したことがなく、またその必要もない時代に生きて、いかにして自分を殺すか、という書『 』を書いた。

- 14、西山宗因（一六〇五～一六八二）の俳諧の一派の作風は「 」と呼ばれる。
- 15、 （一六四四～一六九四）は、「今晚の床」や「銀が敵」の経済生活ではなく、古池や佐渡の荒海や古戦場の夏草を詠んで、俳諧に独特の作風を開いた。
- 16、井原西鶴（一六四二～一六九三）の生涯について俳諧師と小説家と旅行家と知られているが、その最初の小説の成功作は『 』（一六八二）である。
- 17、与謝蕪村が故郷の長柄川に沿う堤で逢った女性に代わって意を述べる『 』（一七七七）では、俳句の間に漢語の五言絶句四首を配して、独特の形式を用いる。
- 18、蕪村はその俳諧が、「俗語を用て俗を離るる」ことを望み、これを「 の法」と呼んでいたのである。
- 19、本居宣長の『 』が『源氏物語』について論じたことは、頗る意味深い。
- 20、田山花袋が、小説家がほのかに暮っていた若い女弟子に逃げられ、彼女の残した蒲団を抱いて泣いたといういじらしい話を書いた小説は、『 』である。
- 21、島崎藤村は、その晩年に長い歴史小説『 』（一九二九～一九三五）を作った。
- 22、『或る女』の主人公は、恐らく有島武郎自身であった。彼はやがてその女主人公の運命を生きる。『 』（一九二〇）を書いて、個人の自己実現の道が恋愛において頂点に達し、そこでは死さえも「自己の拡充」であると主張していた。
- 23、一九三〇年代の後半から太平洋戦争にかけて、挙国一致軍国主義の時代に、永井荷風は、人との交わりを断ち、私娼窟に遊んで、『 』（一九三七）を書いた。
- 24、 （一八八六～一九六五）は、『源氏物語』を現代語に訳し（一九三九）、随筆「陰翳礼讃」（一九三三）を書いた。
- 25、「道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思うころ、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい速さで麓から私を追ってきた。」とあるのは、『 』の冒頭である。
- 26、志賀直哉（一八八三～一九七一）は、自己を中心として、日常生活の些事をほとんどそのまま、平易、簡潔、明快な文章で描き、多くの短篇と唯一の長篇小説『 』（一九二一～一九三七）を書いた。
- 27、斎藤茂吉（一八八二～一九五三）は、正岡子規・伊藤左千夫の系統を継いで、雑誌『 』（創刊一九〇八）に拠り、自由詩型を用いず、俳句を作らず、和歌に専念していた。
- 28、「自然主義」が生み出した「 」小説は、両大戦間に流行した。
- 29、北海道で銀行員をして暮らしていた小林多喜二（一九〇三～一九三三）、NAPFに参加して、『戦旗』に小説「 」（一九二九）を発表した。
- 30、宮本百合子（一八九九～一九五一）は、若い女が精神的にも経済的にも独立の人間として育ってゆく過程として、描いたのが、長篇小説『 』（一九二四～一九二六）である。
- 31、広島の人井伏鱒二は、広島に押し入った力、即ち原子爆弾とその衝撃の意味を自分自身の世界を完結させるためにも、描く必要があったのは、長篇小説『 』（一九六五～一九六六）である。

- 32、吉川英治（一八九二～一九六二）の代表作長篇『 』（一九三五～一九三七、一九三七～一九三八、「朝日新聞」連載）で、日中戦争の時代に広く読まれた。
- 33、芥川龍之介は、芸術の価値を人生よりも高いとする 主義を作家の姿勢とした。
- 34、 派を代表する横光利一は、『蟬』『日輪』の新しい感覚的な表現方法により、新進作家としての地位を固めた。
- 35、川端康成には、「 の小説」と言われる短編小説群があり、様々な人間像や人物の心理を鮮やかな筆で書き分けている。
- 36、最初詩人として出発した伊藤整は、新心理主義に傾き、小説『幽鬼の街』、評論集『 』を発表した。
- 37、中国古典と西洋文学の素養を基にして自意識を克服しようとした中島敦は、『 』『李陵』『弟子』『悟浄歎異』などの歴史に取材した作品で、理知的な人物描写や引き締まった格調の高い表現、巧みな構成力を示した。
- 38、 は、戦後は再び破滅的指向が強くなり、『斜陽』『人間失格』などを書いた。
- 39、三島由紀夫は、輪廻転生を主題とした『 』等を書き、昭和四十五年に衝撃的な自殺を遂げた。
- 40、大江健三郎は、『 』などで出発し、『飼育』で芥川賞を受賞した。
- 41、明治十五年（一八八二）に、西洋詩を手本にした『 』が出版され、ここに新しい詩の時代が始まる。
- 42、『於母影』の詩風の影響を受けた北村透谷は、長編叙事詩『 』や劇詩『蓬莱曲』などの作品を発表した。
- 43、象徴詩の流れに大きな影響を及ぼしたのは、明治三十八年（一九〇五）に刊行された上田敏の訳詩集『 』である。
- 44、中原中也の代表的な詩集には、『在りし日の歌』や『 』がある。
- 45、草野心平は、当初アナーキズム的傾向に寄ったが、次第に浪漫的資質を現し、『 』によって、生命感溢れる庶民的感情を表現した。
- 46、正岡子規は、「私」を去る単純素朴な「 」を主張し、その実践の場として歌会を開いた。
- 47、清少納言は、幼少から漢詩や和歌に馴染んで、中宮定子に仕え、その寵愛を得て、華麗な才能を発揮し、それが『 』の世界を形成した。
- 48、『徒然草』の作者は、 である。
- 49、 は、芸術理論を展開して、『花伝書』『花鏡』『猿楽談儀』などをはじめとする多くの演劇論を著した。
- 50、江戸時代は、 とも呼ばれる。

Ⅱ、次の1と2の古典文を読んで、感じたことを述べてください。（2×5＝10点）

1、

月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか

片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海濱にさすらへ去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひてやゝ年も暮、春立る霞の空に白川の関こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず。もゝ引の破をつゞり、笠の緒付かえて、三里に灸すゆるより、松嶋の月先心にかゝりて、住る方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞひなの家

面八句を庵の柱に懸置。

2、

西行の和歌における、宋祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、その貫道するものは一つなり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見るところ花にあらずといふことなし。思ふところ月にあらずといふことなし。像、花にあらざる時は夷狄にひとし。心、花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。

Ⅲ、次の術語を解釈せよ。(4 X 10 = 40点)

- 1、転向
- 2、五山文学
- 3、純文学
- 4、中間小説
- 5、今様
- 6、新感覚派
- 7、記紀歌謡
- 8、相聞
- 9、文章博士
- 10、反歌

Ⅳ、中国語で夏目漱石の代表作とその人生態度について語れよ。(1 X 10 = 10点)

Ⅴ、ノーベル文学賞を受賞した日本人作家大江健三郎の文学とその人物について述べなさい。
(1 X 20 = 20点)

Ⅵ、『源氏物語』を鑑賞せよ。(1 X 20 = 20点)